

良田平田遺跡

よしだひらた いせき

定められていた
ファッション



<3区>

【古代の役人のベルト金具が出土！】



※3点の写真はほぼ原寸大

調査区の西辺部と谷の中央部を流れる溝の中から、古代の役人が身につける腰帯（ベルト）の金具が3点出土しました。左上是「巡方」で長方形をしており、下半部に長方形の透かし孔があげられています。中央は「丸鞆」でかまぼこを切ったような形をしており、やはり下半部に長方形の透かしが入っています。巡方も丸鞆もベルトの側面に取り付けるものです（右の写真参照）。どちらも銅製で表面に黒漆が塗られていました。また、右上は銅製の「鉈尾」でベルト端に取り付けられた金具です。4本の鉈で取り付けるようになっています。

こうした腰帯の金具といえども、自由に着用できたわけではありません。奈良時代の天平宝字元（757）年に定められた『養老衣服令』には、五位以上の役人（貴族や国司など）は金銀製の金具を、六位以下の中・下級役人は“烏油”つまり黒漆を塗った銅製の金具を用いることが規定されていました。

今回の調査で田畠の経営に係る管理施設と推定される建物跡がみつっていますが、そこで勤務していた人物は中・下級の役人だったことが想定できます。



※写真出典：奈良国立文化財研究所ほか編 1989『平城京展』図録

『養老衣服令』朝服条 天平宝字元（七五七）年 五月二十日施行
朝服。一品以下五位以上、並皂羅頭巾、衣色同。礼服。牙笏、白袴、金銀腰帶（或云、金銀者二用者、任五位以上之意。耳。在。左。穴。）、白襪、烏皮履。六位、深緑衣。七位、浅緑衣。八位、深緑衣。初位、浅緑衣。並皂羅頭巾、木笏、烏油腰帶、白袴、白襪、烏皮履、袋。従色。（後略）



【平安時代には存在した“良田（荒田）”の地名】



奈良～平安時代の墨書土器の中に、「荒田大内」と書かれたものがありました。良田地区は明治3年まで“荒田村”と呼ばれており、地区内に荒田神社もあります。荒田という地名が平安時代（約1200年前）まで遡ることがわかる貴重な発見になりました。

“荒田”が平安時代からあった地名だったなんて、びっくりしたよ！



鳥取西道路の遺跡を掘る！

第30号 2011年10月21日

発掘調査では、墨で文字などが書かれた土器・木器が出土することがあります。長い年月の間に墨が薄くなっている場合、肉眼では何が書かれていたのか見えません。しかし、そこには重要な情報が…。



どんな文字も見逃さない科学の眼



右の写真の木簡は、肉眼では文字を読むことができませんでしたが、赤外線カメラで撮影したところ、「磨磨國播國」の文字が鮮明に浮かび上がってきました。書かれてあった文字は文章として成り立たず、その組み合わせからすれば、“播磨国”の文字の練習をした“習書木簡”だったと考えられます。

地域の歴史を明らかにするために、どんな小さな情報も“科学の眼”は見逃しません。
<協力：鳥根県立古代出雲歴史博物館>

墨で文字などが書かれた出土品（特に木簡などの木製品）を観察する時は、「赤外線カメラ」が大活躍します。赤外線とは、人間の目では見る（感じる）ことができない光です。赤外線を感じることができるカメラでのぞけば、墨が残っている部分は赤外線が吸収されて黒く映り、それ以外の部分は反射して白く映ります。



「磨磨國播國」

（財）鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所
〒680-1133
鳥取市源太12番地
（旧鳥取湖陵高校美和分校内）
TEL：0857-51-7553
FAX：0857-51-7550
メールアドレス：
matsaik@pref.tottori.jp

10月15日（土）に開催した良田平田遺跡、高住井手添遺跡・高住牛輪谷遺跡の現地説明会にはそれぞれ約120名の方にお越しいただきました。多くの方のご参加ありがとうございました。今後も発掘調査の状況はホームページなどでお知らせしていきますので、どうぞご期待ください。

鳥取県教育文化財団 調査室

高住牛輪谷遺跡

たかすみうしわだにいせき

ムラの境に掘られた溝



調査区の中央付近で、弥生時代後期～古墳時代前期（約 1800～1600 年前）の溝と土坑が集中して見つかりました。

溝は遺跡南東の丘陵に沿うように、カーブを描いて掘られています。そして、土坑はこの溝よりも丘陵側に集中しており、湖山池へ向かって低くなる北側ではほとんどみつかりません。

そのため、この溝は居住域の端を区画するために掘られたのではないかと考えています。丘陵の小高いところに集落があったのでしょうか。



土坑の集中する範囲

区画溝



区画溝（白い点線）を東側からみる

10月からは、これまで調査を進めてきた「1区」だけでなく、その東側にある「2区」の発掘も行っています。

どのような発見があるか、ご期待ください！

丘陵の上にはどんな集落があったのかなあ？



高住井手添遺跡

たかすみいでとえいせき

弥生人の治水技術



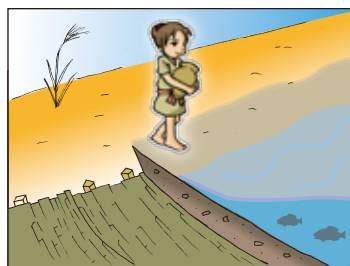
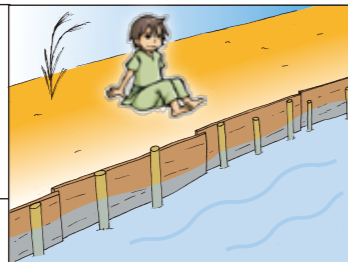
高住井手添遺跡では、弥生時代中期（約 2200～2100 年前）の溝が見つかりました。強い水の流れから溝を守るため、杭や板、樹皮を使った護岸施設も造られています。その技術は現代にも通じるもので、弥生時代の人々が工夫をこらして溝を管理していたことがわかります。

溝を守る

杭・板・樹皮で造られた護岸施設は、いくつかのパターンがあります。ここでは、代表的な構造を2つ紹介します。

横板を杭で止める

溝の壁面を板でふさぎ、水の流れで壁面が浸食され、崩落するのを防ぎます。



樹皮の敷設

溝の壁面などに樹皮を敷きつめ、その上を粘土などで覆います。強い水の流れを受けても樹皮で補強されているため、簡単にはえぐれません。



高住平田遺跡

たかすみひらた いせき

砂に埋もれた水田！



調査区南側の3区では、室町時代（約 700～500 年前）ごろの川と、その両岸で水田の跡が見つかりました。水田は高さ 5cm ほどのアゼで区画されていて、現在の水田のような長方形で整然と並んでいるのではなく、いびつな形をしているものもありました。



↑ 3区でみつかった中世の水田と川（北西から）

← 川の東側にあった水田の区画

※ 白い破線は水田の区画を、青塗り部分は川を表わしています。

みつかった水田は、全体が3区にある川が洪水を起こして堆積した黄色い砂で埋まっていた。そのため、当時のアゼがほぼそのままの形で残っていました。

また、水田には砂で埋まった小さなへこみが点々としていますが、これらは人や牛の足跡です。牛を使って水田を耕したりしたときについたものでしょう。



黄色い砂

アゼ